

病害虫発生予察情報(4月予報)

平成28年3月28日
静岡県病害虫防除所長

1. 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや少	3月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	灰色かび病	発生量：やや少 但し、中部地域は多	3月中旬発生量：少(－) 但し、中部地域は多 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	炭疽病	発生量：多	3月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	アブラムシ類	発生量：やや少	3月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+)
	ハダニ類	発生量：やや少	3月中旬発生量：やや少(－) 気象予報：気温：高い(+)
	アザミウマ類	発生量：多	3月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+)
トマト	灰色かび病	発生量：多	3月上中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	葉かび病 すすかび病	発生量：少	3月上中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	疫病	発生量：やや少	3月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：多 タバココナジラミ発生量：少	3月上中旬発生量 黄化葉巻病：やや多(+) コナジラミ類：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い(+)
	ハモグリバエ類	発生量：少	3月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い(+)
チャ	カンザワハダニ	発生量：多 (摘採面寄生葉率2.7%)	3月中下旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
ウンシュウ ミカン	そうか病	発生量：やや多	3月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)

作物名	病虫害名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
ウンシュウ ミカン	ミカンハダニ	発生量：多 (寄生葉率 2.7%)	3月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
カンキツ	かいよう病	発生量：少 (中晩柑 発病度(葉) 1.1)	3月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
果樹全般	カメムシ類	発生量：並	越冬虫量：並(±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病虫害に限り、平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2. 予報の根拠と防除対策

【イチゴ】

<生育の概況>

3月の巡回調査では、平年並の生育状況であった。

うどんこ病

予報の根拠

- ・3月の巡回調査では、平均発病株率は0.3%（平年1.1%）で平年に比べ少ない発生であった。
- ・1か月予報では、4月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・株の過繁茂は本病の発生を助長させるため、不要な下葉、果梗枝は除去する。
- ・現在発病が少しでもみられるほ場では、早急に防除を行う。
- ・発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

灰色かび病

予報の根拠

- ・3月の巡回調査では、平均発病株率は1.9%（平年1.4%）であった。地域別にみると、東部地域1.6%（平年2.8%）、中部地域（石垣栽培）3.8%（平年1.1%）、西部地域0.2%（平年0.3%）と、中部地域（石垣栽培）において多発していた。
- ・1か月予報では、4月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・天窓、側窓の開閉、かん水に十分注意し、ハウス内が多湿にならないようにする。
- ・枯葉、老化葉、不要な果梗枝、発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外で埋没処分する。

炭疽病

予報の根拠

- ・3月の巡回調査では、平均発病株率1.3%（平年0.7%）で平年に比べ多い発生であった。
- ・1か月予報では、4月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・発病が見られたハウスでは、温度管理に注意し、日中高温（25℃以上）にならないようにする。発病株は根から抜き取り、ビニール袋などに入れてほ場外へ持ち出し処分する。
- ・発病が見られたほ場の株は潜伏感染している恐れがあるので、健全に見えても親株にしない。また、発病が見られたハウスでは夏に土壤消毒を徹底する。

アブラムシ類

予報の根拠

- ・3月の巡回調査では、平均寄生株率は0.7%（平年1.3%）で平年に比べ少ない発生であった。
- ・1か月予報では、4月の気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・アブラムシ類の発生に注意し初期防除に努める。すでにアブラムシ類が発生しているほ場では、早急に防

除する。

- ・天敵を利用している場合は、アブラムシ類のマミーの発生状況をよく観察する。アブラムシ類が多発した場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

ハダニ類

予報の根拠

- ・3月の巡回調査では、平均寄生株 14.1%（平年 20.1%）で平年に比べやや少ない発生であった。ハダニ類の発生は、圃場により大きく異なり、多発生ほ場がみられたが、天敵の活動も盛んであった。
- ・1か月予報では、4月の気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除を徹底する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、薬剤のローテーション散布を心がける。密度が下がらない場合は、物理的防除剤を利用する。
- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類、天敵の発生状況をよく観察し、天敵の追加放飼または薬剤散布をする。薬剤を散布する時は、天敵に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

アザミウマ類

予報の根拠

- ・3月の巡回調査では、平均寄生株 11.7%（平年 8.3%）で平年に比べ多い発生であった。
- ・1か月予報では、4月の気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・アザミウマ類は、花での発生をよく観察し、必要のない花は摘み取る。
- ・例年多発するほ場では、開花初期に集中的に防除を行う。
- ・ハダニ類、アブラムシ類の天敵を利用している場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや早い。

灰色かび病

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は 10.8%（平年 5.1%）と平年より多い発生であり、発病が茎に及んでいる施設も確認された。
- ・1か月予報では、4月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ハウス内の湿度の上昇により発生が増加するので、日中の換気を早めに行い施設内の除湿に努める。特に朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生をいちじるしく助長するため、暖房機や循環扇を利用して植物体への結露を防止する。
- ・株の過繁茂により発生が増加するので、不要な下葉を除去する。

- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、本病は耐性菌が発生し易いため、薬剤のローテーション散布を心がける。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ハウス外の土中深く（地下 50 cmより深く）に埋めるなど適切に処分する。

葉かび病、すすかび病

予報の根拠

- ・ 3月上中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は0.1%（平年16.0%）と平年より少ない発生であった。
- ・ 本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる。本県では、12月以降は葉かび病が優先する傾向がある。
- ・ 1か月予報では、4月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する。本県では葉かび病抵抗性品種の利用が進んでいるが、葉かび病抵抗性品種を使用していない施設では、特に発生に注意する。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤のローテーション散布を心がける。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・ 発病葉は伝染源となるため速やかに摘み取り、ハウス外の土中深く（地下 50 cmより深く）に埋めるなど適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

疫病

予報の根拠

- ・ 3月上中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 0.6%）。
- ・ 1か月予報では、4月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。
- ・ ハウス内の湿度の上昇により発生が増加するので、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 株の過繁茂により発生が増加するので、不要な下葉を除去する。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ハウス外の土中深く（地下 50 cmより深く）に埋めるなど適切に処分する。

黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・ 3月上中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病株率は 3.9%（平年 2.6%）と平年よりやや多い発生であった。
- ・ コナジラミ類の発生は確認されなかった（平年寄生株率 2.2%）。
- ・ 1か月予報では、4月の気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなど適切に処分する。

- ・わき芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・今後、気温が上昇しタバコナジラミの発生に適した条件となる。成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

ハモグリバエ類

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、ハモグリバエ類の発生は確認されなかった（平年寄生株率1.2%）。
- ・1か月予報では4月の気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・上中位葉に白点（産卵痕や食害痕）や絵描き症状（幼虫によるせん孔）が見られる場合は速やかに薬剤防除を実施する。

【チャ】

カンザワハダニ

予報の根拠

- ・3月中下旬の巡回調査では、摘採面での寄生葉率2.5%（平年1.5%）、裾部での寄生葉率2.9%（平年3.0%）で、発生は平年に比べやや多かった。
- ・1か月予報では、4月の気温は高く、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・摘採面の葉に寄生が見られる茶園では早期に防除を行う。その際、葉裏に薬液が届くように散布する。
- ・新芽が凍霜害を受けると、被害を受けなかった新芽にハダニが集まり集中加害することがあるので、防霜対策を万全にする。
- ・新芽がハダニの被害を受けた場合は、薬剤の摘採前日数に注意して直ちに防除を行う。

<その他病害虫>

褐色円星病（緑斑症）

防除対策

- ・3月中下旬の巡回調査では、県平均発病葉率32.2%（平年12.1%）と、平年よりも多かった。
- ・本病は、多発すると一番茶萌芽期から生育期に下葉が落葉し、品質・収量への被害が大きくなる。薬剤による防除は夏期以降となるが、被害は一番茶生育期に顕著となるため、この時期に発生状況を確認しておく。

マダラカサハラハムシ

防除対策

昨年の秋に葉を食害される被害が発生した茶園では、一番茶芽に越冬成虫による被害が発生するおそれがある。そのような茶園では、一番茶生育期に薬剤防除を行う。

【ウンシュウミカン】

＜生育の概況＞

生育は平年並である。

そうか病

予報の根拠

- ・ 3月の巡回調査では、葉での平均発病度は0.02（平年0.01）と平年並みの発生だった。
- ・ 1か月予報では、4月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病は新梢伸長期の降雨により感染が助長されるので、展葉期に予防散布を行う。
- ・ 被害のある夏秋梢は伝染源となるため、できるだけ除去する。

ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 3月の巡回調査では、平均寄生葉率は3.1%（平年2.1%）と平年よりも多い発生だった。
- ・ 1か月予報では、4月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ マシン油乳剤を散布する場合、散布むらや散布直後の降雨で効果が低下するので、晴天の日が2～3日続く時に防除を実施する。

【カンキツ】

かいよう病

予報の根拠

- ・ 3月の巡回調査では、中晩柑類の葉の発病度は0.4（平年1.1）と平年より少なかった。ウンシュウミカンでは発生は認められなかった。
- ・ 1か月予報では、4月の気温は平年より高く、降水量は平年並であるため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 夏秋梢の病斑は早急に除去する。
- ・ 防風垣、防風網の整備等を行い、防風対策に努める。
- ・ 昨年発病が見られた園地では、発芽前または5月上旬、下旬に銅剤の散布を行う。4月中は新芽に葉害が出ることもあるので散布を控える。

【果樹全般】

チャバネアオカメムシ（越冬状況）

- ・ 今年1月に行った落葉中の越冬量調査では、県全域での越冬成虫の平均は0.7頭/m²（平年0.8頭/m²）と平年並であった。
- ・ 地域によっては発生の状況が異なる場合があるため、ウメ・ビワではほ場の発生状況をよく観察し、早期発見・防除に努める。

【イネ】

<その他病害虫>

苗立枯病、いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、イネシンガレセンチュウ

防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・ 県病害虫防除基準に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・ 自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・ 厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

育苗管理

- ・ 出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・ シルバーポリシートによる育苗では高温多湿になりやすいため、換気を行い温湿度管理に注意する。
- ・ 本県では、MBI-D 剤（ウィン、デラウス、アチーブ）に対し、いもち病で耐性菌の発生事例がある。また、他県では QoI 剤（嵐、アミスター、オリブライト、イモチエース、イモチミン、オリザトップ）でも、いもち病で耐性菌の発生事例がある。これら耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料の掲載について」の項を参照）。

斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

防除対策

主要種のアカスジカスミカメは雑草に産み付けられた卵で越冬し、春に孵化する。孵化直後は、水田周辺のイネ科雑草（スズメノテッポウ、セトガヤ、早生型チガヤ）が生息地となることから、4月中に除草すると効果的である。ただし、成虫の行動範囲は最大で半径 300m 程度と広く、個々の水田周辺を除草するだけでは十分な防除効果が得られない場合もあるため、地域ぐるみで除草することが重要である。

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

昨年 7～9 月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。貝を破砕するため、3 月までにロータリー耕を実施していない場合は速やかに実施する。ロータリー耕は通常の荒起こしより車速を遅くし、ロータリーの回転を上げて浅く高速で耕すと効果が高い。

周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を破砕する。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【コムギ】

<その他病害虫>

赤かび病

防除対策

- ・ 4月に発生が少なくても、5月に多発することがあるので予防散布に努める。特に出穂期から乳熟期にかけて、気温が高く降雨が続くような場合は注意する。
- ・ 防除適期は開花期前後となるので、一回目の薬剤散布を穂揃期から5日目までに行い、さらにその5～7日後に二回目の薬剤散布を実施する。

3. 季節予報

(1) 1か月予報 (東海地方 平成28年3月24日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 3月26日から4月25日

<特に注意を要する事項>

2週目は、気温がかなり高くなる可能性があります。

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	30	60
1か月	降水量	30	40	30
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	10	40	50
2週目	気温	10	30	60
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

- 1か月 : 3月26日(土)～4月25日(月)
1週目 : 3月26日(土)～4月1日(金)
2週目 : 4月2日(土)～4月8日(金)
3～4週目 : 4月9日(土)～4月22日(金)

(2) 3か月予報 (東海地方 平成28年3月25日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 4月から6月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりで

す。この期間の平均気温は、高い確率50%です。

4月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

5月 天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

6月 平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

【気温】

3か月			4月			5月			6月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	30	50	20	30	50	20	40	40	20	40	40

【降水量】

3か月			4月			5月			6月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
30	30	40	20	40	40	30	40	30	30	30	40

※ 参考資料

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	4月	5月	6月	4月	5月	6月
浜松	14.7	18.7	22.0	168	191	241
静岡	14.9	18.8	22.0	210	213	293
三島	14.4	18.5	21.9	149	161	228

* 降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※参考資料

1. 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1よりも多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--

平成 27 年度 技術情報第 8 号
茶 カンザワハダニ

平成 28 年 3 月 28 日
静岡県病虫害防除所長

県内各地域の茶園でカンザワハダニの多発生園が確認されています。
新幼虫の発生密度が平年を上回ることが予想されるため、防除の徹底をお願いします。

1 発生状況

3 月中下旬の巡回調査では、摘採面の平均寄生葉率は 2.5%（平年 1.5%）、同発生面積率は 54.0%（平年 33.6%）で平年より高かった。

県内各地域の防除員等から一部茶園における多発の報告がある。

現在、新幼虫のふ化が始まっており、1 か月予報では、4 月の気温は高いことから、新幼虫の生育は平年に比べ早まることが予想される（図 1）。

新芽が凍霜害を受けると、被害を受けなかった新芽にハダニが集まり集中加害することがあるので、防霜対策を万全にする。

2 防除方法

- (1) 防除の可否は、周辺茶園の摘採開始日等も十分考慮したうえで総合的に判断する。
- (2) 摘採面におけるハダニの発生状況を確認し、寄生葉率が 10%（100 葉観察調査）を超える前に行うと効果が高い。
- (3) 散布薬量は 400 リットル/10a を目安に葉裏に薬液が届くよう丁寧に散布する。この時に薬液が園外に飛散しないよう、十分注意する。
- (4) 防除薬剤については表 2 を参考にするとともに、農薬の使用に当っては必ずラベルを確認し使用基準を遵守する。特に、昨秋以降に防除を実施した茶園では、薬剤の使用回数に十分注意する。
- (5) 平年より気温・湿度が高い条件下では、天敵のカブリダニ類の活動が活発化し、ハダニの増殖を抑える働きが高まる。天敵が確認される茶園では、天敵への影響の少ない殺ダニ剤を選択して使用する（図 2）。
- (6) 不明な点は、病虫害防除所、茶業研究センター、農林事務所、農協等指導機関に問い合わせる。



図 1 カンザワハダニ（卵・幼虫・成虫） 図 2 ハダニを捕食する天敵カブリダニ

表1 3月のカンザワハダニの発生状況

地域名		摘採面寄生葉率(%)	摘採面発生面積率(%)
富士山麓	平均	0.6	30
	平年値	1.3	27
静岡市北部	平均	3.3	60
	平年値	1.2	33
牧之原	平均	1.5	60
	平年値	1.7	32
小笠・磐田原	平均	3.7	70
	平年値	0.8	31
川根地域	平均	3.5	50
	平年値	2.4	45
県全体	平均	2.5	54
	平年値	1.5	34

調査時期:平成 28 年3月 14~23 日

各地域 10 か所調査 平年値は過去 10 年間の平均値

表2 茶におけるカンザワハダニの主な防除薬剤

商品名	使用方法	希釈倍数	時期	回数	作用機構分類 ¹⁾
粘着くん液剤	散布	100 倍	摘採前日まで	-	-
アグリメック	散布	1000 倍	摘採 7 日前まで	1 回	I:6
ミルベノック乳剤	散布	1000 倍	摘採 7 日前まで	1 回	I:6
カネマイトフロアブル	散布	1000 倍	摘採 7 日前まで	1 回	I:20B
コテツフロアブル	散布	2000 倍	摘採 7 日前まで	2 回以内	I:13
ダニゲッターフロアブル	散布	2000 倍	摘採 7 日前まで	1 回	I:23
スターマイトフロアブル	散布	2000 倍	摘採 7 日前まで	1 回	I:25A
ダニサラバフロアブル	散布	1000~2000 倍	摘採 7 日前まで	2 回以内	I:25A
オマイト乳剤	散布	1500~2000 倍	摘採 14 日前まで	2 回以内	I:12C
パロックフロアブル	散布	1000~3000 倍	摘採 14 日前まで	1 回	I:10B
マイトコーネフロアブル	散布	1000 倍	摘採 14 日前まで(但し、遮光する栽培では遮光開始 14 日前まで)	1 回	I:un

1) 世界農薬工業連盟 殺虫剤抵抗性対策委員会 (IRAC) による分類。農薬抵抗性の発達を回避するため、同一コードの薬剤は連用を避ける。

※静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準 (<http://www.s-boujo.jp>) 及びラベルの記載内容を確認し使用すること。

問い合わせ先：静岡県病虫害防除所（TEL：0538-36-1543）

病虫害防除所 HP（URL）：

<http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病虫害防除基準 HP（URL）：<http://www.s-boujo.jp/>